

感情と情報処理方略

伊 藤 美 加

Affect and Information Processing Strategies

Итон Мика

感情と情報処理方略に関する研究

認知心理学における感情研究

われわれは、日常生活を営む上で、喜怒哀楽といった多様な感情に突き動かされている。このような感情が生じると、われわれの思考や判断、評価はどのように変わるだろうか。感情がわれわれの認知活動に影響を及ぼすのは、われわれが生きていく上で何か機能的な価値をもたらすからだろうか。このような問題を積極的に取り組む試みが、近年注目を集めている。従来の認知心理学では、人間の情報処理の知的側面のみに注目していたが、1980年代以降、認知を純粋な知的情報処理としてではなく、感情との相互作用という観点から捉え直そうという立場の研究が増え始めた。

実際、日常生活の中でわれわれが行っている認知活動を振り返ってみると、感情的側面を含まない認知はほとんど存在しないことに気づくのではないだろうか。感情は認知と独立して働くのではなく一体として働くという意味において、両者はもはや切り離して考えることはできないのかもしれない。

そして現在は、感情と認知との相互作用を単に確認するだけの研究ではなく、どの感情が生じたときに、どの認知過程にどのような影響が観察されるのかを追求するアプローチが求められていると言えよう。本論文は、そのようなアプローチの中でも、近年盛んな感情と情報処理方略に関する研究動向を概観するのが目的である。

ここでは、人間の心的情報処理における知覚、記憶、思考、判断等の知的側面を認知 (cognition)、快・不快等の情的側面を感情 (affect) とする。

感情が認知過程に及ぼす影響について検討する前に、まず感情の定義について大まかに述べておく。

用語の定義

「感情 (affect)」という言葉が指し示している内容は多様で、様々な定義がある。一般に、感情とは「情動 (emotion)」と「気分 (mood)」の両方を含んだ概念とされる (Forgas, 1995)。情動は、喜びや怒りなど、何らかの特定の対象が原因となって生じる、かなり強い感情状態で、一過

性の生理的興奮や表出行動を伴うことが多い。それに対して、気分は、なんとなく楽しいとか悲しいといった、明確な対象が無く生じる、比較的弱い感情状態で、一定の持続時間を持つと定義される。本論文では、“快—不快”や“好ましい—好ましくない”のような比較的安定した正負の反応として、ポジティブな（例：楽しい、高揚した）感情とネガティブな（例：悲しい、憂鬱な）感情とを区別する。なぜなら、感情には細かくみると様々な類型や次元が存在するのは確かだが、このような“ポジティブ—ネガティブ”という一次元の感情の性質の区別は、非常に基本的な区別とされ、これまでの研究もこの考えに沿ってなされているからである。

目的と構成

感情と情報処理方略に関する近年の研究動向は、ポジティブな感情とネガティブな感情とが及ぼす影響の非対称性の関心から、両感情は異なる処理方略を促すとされ、その処理方略の性質やメカニズムへの関心へと移行しつつある。まず、感情と情報処理方略に関する初期の研究を概観し、両感情は異なる処理方略を促すと考えられるようになった経緯を示す。次に、どのような処理方略が選択されるのかという処理方略の性質を明らかにしようとする、二人の研究者（Bless, 2000; Fiedler, 2000）の考え方及びそれを支持する研究結果について紹介する。最後に、なぜ感情が処理方略の選択に影響を及ぼすか、そのメカニズムを特定しようとした研究成果を紹介した後、感情は状況の解釈を介在して働くことによってその状況に適切に対応できる処理方略を促すという、感情の認知に対する適応的機能について論じる。

ヒューリスティック型の処理方略とシステムティック型の処理方略

感情状態が認知過程に及ぼす影響に関する研究は膨大だが、情報の影響（informational effect）と処理の影響（processing effect）との大きく2つに分類することができる（Fiedler, 2000; Forgas, 2000）。気分一致効果（mood-congruent effect）は、感情状態と認知パフォーマンスとの交互作用に関心があり、どのような情報を処理するのか（what people think）という認知内容（the content of cognition）を問題とする。例えば、特定の感情状態と一致する情報は記憶成績が良いことを指す（詳細は、伊藤（2000 a, b)）。一方、感情と情報処理方略に関する研究は、感情状態が情報処理方略に及ぼす影響に関心があり、どのように情報を処理するのか（how people think）という認知過程（the process of cognition）を問題とする。

感情が認知過程に及ぼす影響の中でもっともよく知られているのが気分一致効果（mood-congruency effect）である。感情研究に認知心理学的観点が導入された1980年代以降、様々な領域で気分一致効果の報告が蓄積された。80年代後半から90年代半ばまで、感情の多様な影響過程に注目した研究が次々と報告されるに伴い、90年代後半以降は、感情のもたらす影響は気分一致効果だけではなく、感情はどのように情報を処理するのかにも影響するという、感情と情報処理方略との関係に関心が向けられるようになった（for review, Bower & Forgas, 2000; Wyer, Clore, & Isbell, 1999）。ポジティブな感情とネガティブな感情とは異なる処理結果が生じることから、両感情が異なる情報処理方略を促すと考えられた。ネガティブな感情は“努力の要る（effortful）”、“分析的な（analytic）”システムティック（systematic）型の処理を、ポジティブな感情は“簡便で（simple）”、“表面的な（superficial）”ヒューリスティック（heuristic）型

の処理を増大させるというおおよそのコンセンサスはあるものの (Clore, Schwarz, & Conway, 1994; Forgas, 1995; Isen, 1987; Schwarz, 1990; Schwarz & Bless, 1991; Schwarz & Clore, 1996), 処理方略の具体的な特性やどのような性質が異なるのかという処理方略の性質, あるいは, どのようにして生じるのかという生起メカニズムといった点については未だ明確に論じられていない。本論文ではこの二点に関する近年の研究動向を紹介する。その前にまず, 初期の実証的研究を示す。

実証的研究

このような, ポジティブな感情はヒューリスティック型の処理を促進するのに対し, ネガティブな感情はシステマティック型の処理を増大させるという主張と符合する研究報告は幾つかある。そのほとんどが, 思考や判断, 様々な対人認知場面における評価や解釈に及ぼす感情の影響を扱っており (for review, Schwarz & Clore, 1996), ヒューリスティック型かシステマティック型の処理を要求する課題条件を設定し, ポジティブな感情の影響とネガティブな感情の影響とのいずれの影響が明確に認められるかを比較検討している。おおよそ, ポジティブな感情とネガティブな感情とのいずれかで課題条件の差が検出され, 分離が見られることを確かめている。

例えば Isen らは一連の研究により, ポジティブな感情の効果として, 連想の独特さ (Isen & Daubman, 1984) や創造的課題に優れること (Isen, Daubman, & Nowicki, 1987), 認知負荷の低い処理をすること (Isen, Means, Patrick, & Nowicki, 1982) を示した。また, 対人評価場面において, ポジティブな感情は直観に基づく判断を, ネガティブな感情は注意深い判断をすることが認められている (Sinclair & Mark, 1992)。このような知見は, 説得場面における感情の影響を検討した研究で最も一貫して認められている (for review, Schwarz, Bless, & Bohner, 1991)。

例えば Bless, Bohner, Schwarz, & Strack (1990) では, 被験者に説得力のある強い内容の説得メッセージと, 説得力に欠ける弱い説得メッセージとを呈示した。ポジティブな感情状態にある被験者は, 説得メッセージに示されている論拠の強さに関係なく同じ様に説得された。それに対し, ネガティブな感情状態にある被験者は, 論拠が強ければ説得されたが, 論拠が弱ければ説得されなかった。また, 説得メッセージに対する評価について, ポジティブな感情状態にある被験者は, メッセージの内容に関わらず同程度に評価したが, ネガティブな感情状態にある被験者は, 強い内容のメッセージをより肯定的に評価した。これは, ポジティブな感情では, メッセージの内容とは関係なく非本質的で表面的な周辺の手がかりに基づいて判断していたことを示す。一方, ネガティブな感情では, メッセージの内容をよく理解した上で判断していたことを示す。

更に, Bless, Mackie, & Schwarz (1992) では, 同様の手続きを用いて被験者に説得メッセージの内容の想起を求めた結果, ポジティブな感情状態にある被験者は, メッセージの内容に関わらず同程度に想起したが, ネガティブな感情状態にある被験者は, メッセージの内容によって想起成績が異なり, 説得を支持する強い内容のメッセージと, 説得を支持しない弱い内容のメッセージとをより想起した。これは, ポジティブな感情では, 符号化する際にメッセージの内容をよく吟味していなかったのに対し, ネガティブな感情では, 符号化時にメッセージの内容を注意

深く分析する精緻化が行われていたことを示す。このような説得メッセージに対する反応が感情状態に依存するという類似の結果は、Mackie & Worth (1989) にも見られる。

以上の知見は、感情状態によって二つの異なる処理方略がそれぞれ選択されていたことを示唆している。つまり、直観に合う情報のみに注目しそれ以外は無視するような処理がなされるときはヒューリスティック型の処理方略が、逆に、直観にとらわれることなく、事実に忠実に情報をくまなく探索するような処理がなされるときにはシステムティック型の処理方略がとられていると考えられる。

処理方略の性質に関する研究

このヒューリスティック型対システムティック型という単純な二分類に対して、近年、再考の試みがなされている。それぞれどのような処理方略を指すのか、性質がどのように異なるのかという処理方略の性質について、より明確化しようとする動向がある (Bless, 2000; Fiedler, 2000; Fiedler & Bless, 2000; Forgas, 2000)。Fiedler (2000) は、処理方略の性質を特定するため、各処理方略がどのような機能を持つのかに焦点を当て、各処理方略に含まれるコンポーネントを詳細に検討する重要性を提案している。一方、Bless (2000) は、各処理方略は既存の知識構造が使えるか否かが異なるとし、ヒューリスティック型の処理方略を既存知識構造の適用の結果と具体化している。更に後述の通り、感情が処理方略の選択に及ぼす影響のメカニズムに関心があり、その介入過程を明確化する試みも行っている。

従来の分類は、認知課題の性質に対応する軸 (例：直観に基づく－基づかない、分析的－分析的でない) の集合体を、ヒューリスティック型対システムティック型という軸によって大まかに代表させるに過ぎなかったのに対し、Fiedler (2000) や Bless (2000) は、情報処理方略の性質をより厳密に定義することで、感情と情報処理方略との関係を明確化したという利点がある。次に順に二人の研究者の考え方とそれを支持する研究知見について述べる。

Fiedler (2000) の二重モデル (dual-force model)

このモデルでは、まず、刺激入力に対応する機能 (accommodation) と知識を適用する機能 (assimilation) という、刺激駆動型 (stimulus-driven) と知識駆動型 (knowledge-driven) との2種類のコンポーネントを想定する。刺激入力に対応する機能によって、入力された刺激を最大限に保存してそのまま再生することで間違いを避ける。それに対して、知識を適用する機能は反対の適応的働きを持ち、既存の知識構造に基づいて新奇情報を生成するように働く。

次に、ポジティブな感情は知識を適用する機能を、ネガティブな感情は刺激入力に対応する機能を支持する (support) と仮定する (Figure 1)。あらゆる認知過程に2種類のコンポーネントが含まれるが、どちらのコンポーネントにより重みがかかるかによって異なるとする。刺激を詳細に分析しなければならない課題では刺激入力対応機能のコンポーネントに重みがかかり、創造的な思考を必要とする課題では知識適用機能のコンポーネントによってその成績が決まる。つまり、感情状態の影響は、課題の要求する認知過程に、2種類のコンポーネントがどの程度含まれるかに依存する。

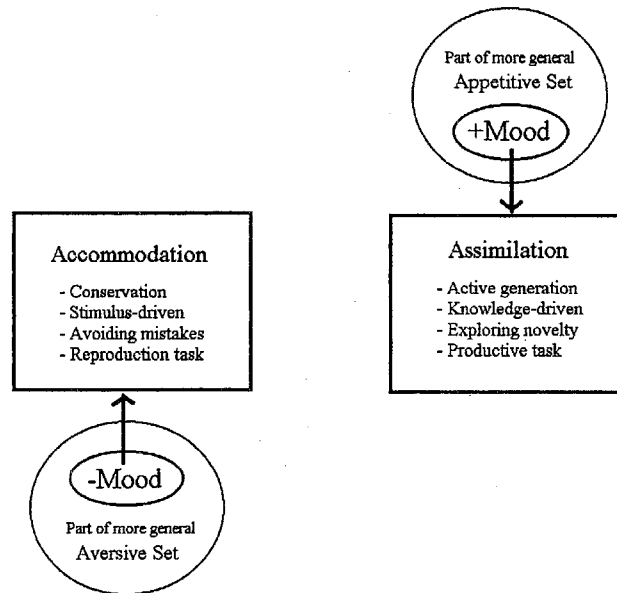


Figure 1 The dual-force model; Mood influences on assimilative and accommodative functions (Fiedler, 2000).

このモデルでは、ポジティブな感情とネガティブな感情とが異なる機能として働くことによって、感情が処理方略の選択に及ぼす影響だけでなく、特定の処理方略における異なる感情の影響についても説明している。刺激入力対応機能のコンポーネントは、その定義から非選択的で、全入力刺激をそのまま保存するのに対し、知識適用機能のコンポーネントは、内的な動機付け傾向や感情状態などの、個人内の選択的な影響全てを反映する。それゆえ、情報を非選択的に受け入れる場合には感情の影響は認められにくいのに対し、情報を知識適用機能によって精緻化することができる場合に、感情の影響はより明確に認められることになる。

Fiedler, Lachnit, Fay, & Krug (1992) は、自己生成効果パラダイムを適用し、ポジティブな感情の影響とネガティブな感情の影響とを比較した。一般に、単語の部分的手がかりから被験者自身が生成した単語は、実験者が呈示した単語を読むだけの場合よりも記憶成績が良いことが知られている。彼らは、この自己生成効果がネガティブな感情よりもポジティブな感情でより明確に認められることを見出した。これはポジティブな感情が、知識適用機能の自発的生成コンポーネントに促進的な影響を及ぼすことを示す。なぜなら、実験者が呈示した単語を読む条件は、そのまま刺激を入力するだけでよく、自発的生成をほとんど必要としない。それに対し、被験者が生成した単語は、単語手がかりから意味的な推測が行われて符号化されると考えられるからである。

一般に、情報を何らかの知識に関連付けて体制化することができれば、その記憶成績が良くなることが知られている。Fiedler (1991) は、この体制化情報の符号化が、ネガティブな感情よりもポジティブな感情でより明確に認められることを見出した。具体的には、気分誘導を行った被験者に、10枚の写真のセットを幾つか見せた。そのセットの中には、幾つかの写真から物語を作ることができるものが含まれていた。提示された写真の偶発記憶成績において、自発的に物語を

作ることができたものではポジティブな感情の効果が認められたが、物語を作ることができなかった写真ではその効果は消失した。これは、ポジティブな感情状態の被験者はネガティブな感情状態の被験者よりも、体制化情報を符号化できる場合は知識適用機能を促されるため、高い記憶成績を招くことを示す。

以上の結果は、遂行する認知課題がどのようなコンポーネントを含むかによって、刺激入力対応機能と知識適用機能のどちらが優勢に働くかが決まり、感情の影響はそれを反映することが示唆される。つまり、ポジティブな感情では知識適用機能が働くため、既存知識に基づくトップダウン思考によってヒューリスティック型の処理方略が促される。それに対し、ネガティブな感情では刺激入力対応機能が働くため、状況的情報へより注意を向けるボトムアップ思考によってシステマティック型の処理方略が行われる。

Bless (2000) の感情の既存知識構造依存仮説 (mood-and-general knowledge assumption)

このモデルでは、ポジティブな感情では既存知識構造を活用しやすくなるのに対し、ネガティブな感情では活用しなくなると仮定する。つまり、ヒューリスティックは、スキーマ、スクリプト、ステレオタイプを含む様々な既存知識表象の集まりであると具体化する。ヒューリスティック型の処理方略を特定情報への既存知識構造の適用とみなしていることから、Fiedler (2000) とおおよそ同じことを述べていると言えよう。言いかえると、ポジティブな感情の人はネガティブな感情の人に比べて、より既存知識構造に依存したトップダウン処理を、ネガティブな感情の人はポジティブな感情の人に比べて、より既存知識構造に依存しないボトムアップ処理をする傾向があると考えた。

例えば Forgas (1992) は、ステレオタイプを持つ 8 人の仮想人物を設定し、それぞれの人物の特徴を記述した文を被験者に読ませた。8 人の人物は、それぞれ特定のステレオタイプ（フェミニスト、スポーツマン等）に属していることを明示し、8 人のうち 4 人はステレオタイプに合う特徴のみを持つ典型的な人物として描き、残り 4 人はステレオタイプに合わない特徴も併せ持つ非典型的な人物として描いてあった。被験者は、ビデオ映画を見ることで感情状態を操作された後、これらの人物に関する記述文を読んで印象を評定し、記述文の内容を再生するように求められた。その結果、ポジティブな感情状態の被験者は、ステレオタイプに合った典型的な人物に関する記述をよく覚えていたのに対し、ネガティブな感情状態の被験者は、ステレオタイプに合わない非典型的な人物の記述をよく覚えていた。

また、Bodenhausen, Kramer, & Susser (1994) では、疑わしい人物に関する記述を読み犯罪者かどうかを決定する際に、ポジティブな感情の被験者は、犯罪ステレオタイプを持つ集団のメンバーであると教示される場合の方がされない場合よりも、その人物をより犯罪者であるとステレオタイプに基づく判断を行っていた。

Bless, Clore, Schwarz, Golisano, Rabe, & Wolk (1996) では、過去経験の想起、または、映画視聴によって感情状態を誘導した被験者に、十分発達したスクリプトを持つよく知った行動（例：レストランに行く）についての情報を呈示した。この情報には典型的なもの（例：給仕係はメニューをテーブルの上に置いた）と、非典型的なもの（例：給仕係は自分のテニスラケットを片付けた）が含まれていた。偶発再認テストの結果、ポジティブな感情の被験者はネガティブな

感情の被験者よりも、スクリプトに典型的な情報を呈示されたと再認しやすかった。これはスクリプトに典型的な行動を推測したため、呈示されたものを正しく再認したと同時に、呈示されていないものを間違えて再認した。一方、非典型的な情報では感情の効果は認められなかった。これはスクリプトに基づく処理がなされていないことを示す。

Bless & Fiedler (1995) では、過去経験想起法によって感情状態を誘導した被験者に、まずある特性や行動が判断対象人物に当てはまるか否かという判断をさせた。この先行課題によるスキーマの活性化が、その後の、どの程度それが当てはまるかの評価にかかる時間に及ぼす影響を検討した。ポジティブな感情の被験者では、中立感情の被験者でよりも、先行する特性判断が後続の対象人物についての評価により強く影響を及ぼした。これはポジティブな感情が活性化されたスキーマに基づく判断推測を促進したことを示す。

以上の結果は、ポジティブな感情は、社会的判断に際して、ステレオタイプ、スクリプト、スキーマのような既存の知識構造の使用を増大させ、ヒューリスティック型の処理方略を採用させるのに対し、ネガティブな感情は逆にそのような既存知識構造を活用しなくなり、個別の詳細な情報を分析するシステマティック型の処理方略に依存することを示唆する。

以上をまとめると、Fiedler (2000) のモデルでは、ヒューリスティック型とシステマティック型の処理方略に、どのようなコンポーネントが含まれるかを提示することで、処理方略の性質を明らかにしているという利点がある。同様に、Bless (2000) のモデルでは、ヒューリスティック型の処理方略を、ステレオタイプやスクリプト、スキーマなどの既存知識構造の適用とみなし、処理方略の性質を具体化しているという利点がある。両者とも、処理方略をトップダウン—ボトムアップという次元として厳密に定義した上で、その具体的な特性について詳細に検討している。それゆえ、両者の立場は、どのような処理特性を持つ認知課題の場合にどのような感情の影響が生じるのか否か、ポジティブな感情とネガティブな感情とが及ぼす処理特性への影響をより正確に反映する統合的見解を重視したアプローチと言えよう。このようなアプローチは、ポジティブな感情とネガティブな感情とが及ぼす影響に、どのような違いがあるのか、どのように情報が処理されるのかについて理解するのに、有用な知見を提供できると期待される。今後も更に実証的研究によって検討していく必要があるであろう。

生起メカニズムに関する研究

もう一つの研究動向として、処理方略の選択がどのようにして生じるのかという生起メカニズ

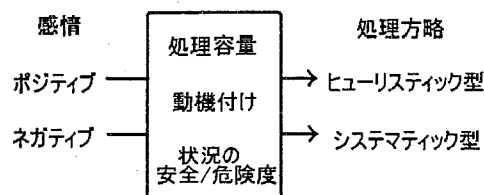


Figure 2 Three alternative processes mediating the impact of positive/negative mood on heuristic/systematic processing.

ムに関心が向けられている。なぜポジティブな感情とネガティブな感情とが異なる影響を及ぼすのかを説明するのに、処理容量 (capacity-related) 説、動機づけ (motivational) 説、機能 (functional) 説という3つの理論的立場がある。これらの説はその介入過程に何を仮定するかが異なると言える (Figure 2)。

理論的説明

処理容量説 (e.g., Mackie & Worth, 1989) によれば、ポジティブな概念はネガティブな概念よりも記憶内で相互に連結しているため、ポジティブな感情によるポジティブな概念の活性化量が増加し、課題への処理容量が小さくなる。それゆえ、ポジティブな感情では、課題へ割り当てられる処理容量が小さいため、よりヒューリスティック型の処理に依存しやすいことになる。

動機づけ説 (e.g., Isen, 1984) によれば、人はポジティブな感情を維持しようとするが、特別な処理を行うことはそのポジティブな感情を阻害しかねないので、認知負荷の高い処理を避けようとする。それゆえ、ポジティブな感情では、ポジティブな感情を維持しようとする動機のため、よりヒューリスティック型の処理に依存しやすいことになる。

機能説 (e.g., Schwarz & Clore, 1983, 1988) によれば、ポジティブな感情は、個体を取り巻く環境が良好であることを意味する。ポジティブな感情では人はあまり慎重になる必要が無いため、より簡便で直観的なヒューリスティック型の処理を用いる傾向を増大させる。それに対し、ネガティブな感情は、状況に問題の多いことを意味する。その問題状況に対処するような、より細部に渡り入念に分析するシステムティック型の処理を用いる傾向を増大させる。

いずれの説が妥当なのかについて幾つかの検討がなされている。ここでは、処理容量説や動機づけ説では説明できない現象を示すことで、間接的に機能説を支持する知見を見出した研究を紹介する。処理容量説や動機づけ説によれば、例えば、ポジティブな感情の場合、複雑な情報処理を削減し効率的な処理としてヒューリスティック型の処理方略を促進するという過程に、処理容量・処理動機づけの減少が介入過程として考えられる。つまり、ポジティブな感情によって記憶内のポジティブな概念が活性化し処理容量を取られるので (Isen, 1987; Mackie & Worth, 1989),あるいはポジティブな感情を維持・高揚させようとするので (Isen, 1987; Wegener, Petty, & Smith, 1995), より努力の要る認知処理を避けるためにヒューリスティック型の処理方略に依存することになる。

Bless et al. (1996) は、二次課題パラダイムを用いて被験者が費やそうとする認知的努力を査定し、二次課題におけるパフォーマンスを比較することでいずれの説が正しいのかを検討した。通常二次課題パラダイムでは、被験者は同時に二種類の課題を行う。一次課題を効率的に行うために二次課題に振り分けられる処理容量を一次課題に割り当てると、一次課題の成績は上がるのに対し、二次課題の成績は低下するはずである。二次課題におけるパフォーマンスに関して、処理容量説や動機づけ説が予想するように、ポジティブな感情が処理容量や処理動機を減少させるならば、一次課題だけでなく二次課題でも妨害がみられることになる。それに対し、ポジティブな感情の被験者が一次課題を既存知識構造に基づいて処理容量を使わずに行うと、二次課題にその分を余分に割り当てることができるため、二次課題の成績は妨害は見られないか、あるいは上昇することになる。

彼らは、感情とスクリプトに関する研究に、この二次課題パラダイムを適用した。被験者はよく知っている行動についての話を聞きながら、二次課題として集中テストを課された。その結果、二次課題の成績はポジティブな感情の被験者が最も良かった。これはポジティブな感情の被験者が一次課題遂行にスクリプトに基づく思考を行ったため、二次課題に余分な処理容量が割り当てられたことを示す。またポジティブな感情の被験者の二次課題の成績が、一次課題の刺激であるスクリプト情報の一致・不一致に依存した。これはスクリプトに非典型的な情報の処理には処理容量が必要になり、二次課題の成績に割り当てられる処理容量が低下するため、成績の上昇が見られなかったことを示す。

また Bless, Schwarz, & Wieland (1996) は、既存知識構造に一貫しない情報の処理の影響を検討した。ステレオタイプに不一致な情報の処理に処理容量が必要なので、割り当てられた処理容量が判断結果に反映されると考えた。感情状態を誘導した被験者に、対人認知場面对象人物のポジティブまたはネガティブな行動記述文（個人情報）を、ポジティブまたはネガティブな集団（カテゴリメンバ情報）として与え、その人物について評価させた。その結果、ポジティブな感情の被験者はステレオタイプ判断を、ネガティブな感情の被験者は個人情報に依存した判断を行った。またステレオタイプに不一致な情報の影響は、ポジティブな感情の被験者でより認められた。例えば、ポジティブな集団メンバがネガティブな行動をする場合、ポジティブな感情の被験者はネガティブな感情の被験者よりも、その人物をよりネガティブに評価した。これはポジティブな感情の被験者は既存知識構造に依存して判断したことを示す。

以上の結果は、スクリプトやステレオタイプなどの既存知識構造に依存したヒューリスティック型の処理は、処理容量や処理動機が減少する結果ではないことを示す。ポジティブな感情の人がヒューリスティック型の処理方略を選択しやすいことと、ポジティブな感情の人で処理容量や処理動機の減少が見られることは、少なくとも部分的に独立の過程であると言えることができるであろう。ポジティブな感情による処理容量や処理動機の減少は、ヒューリスティック型の処理の生起に十分条件であって必要条件ではないと考えられる。また、機能説が間接的に支持されているものの、機能説以外の説明も考えられうること、機能説を直接的に証明する実証的研究がないことから、今後の更なる研究が待たれる。

感情の適応的機能

以上をまとめると、感情は認知を妨害したり歪曲させるのではない。機能説に示されるように、感情は現在の心理学的状況を知らせるという機能的意味を持つ。ポジティブな感情は状況が安全であることを知らせるのに対し、ネガティブな感情は状況に問題があることを知らせるという機能説に従うと、ポジティブな感情状態にある人では、事態は好転しており快適であるならば努力の要る処理に従事する動機づけは低く、ヒューリスティック型の処理方略に依存するだけで十分である。それゆえ情報に割り当てられる認知容量を減少させ、現在の状況で最も有益だと思われる情報へ適切に注意を向けられる。それらは拡散的思考、様々な積極的行動へと導くであろう。それに対して、ネガティブな感情状態にある人では、問題状況をうまく取り扱おうと現在の状況の特異性に焦点を当てることによって、システマティック型の処理方略を促す。それゆえヒューリスティック型の処理方略は控えられ、個別の情報一つ一つに注意を向けなければならない。そ

れらは慎重な行動へと導くであろう。このように個人の現在の感情状態は、現在の状況の解釈を介在して、どの程度どのような処理方略に依存するかに影響を及ぼし、更に特定の行動に対するアクセルとブレーキの役割をも併せ持つことになるとも言える。

ここで感情の意味を問い直す必要があると考えられる。というのも、感情が生起する文脈が異なればその影響も異なると考えられるからである。認知的評価理論(cognitive appraisal theory)では、感情を引き起こすもととなった出来事や、状況をどのように認知的に評価するかによって、多様な感情経験が生成されるとする(Ortony, Clore, & Collins, 1988)。例えば生起した結果の望ましさの程度や重要性、原因の知覚など、様々な側面からの状況認知によって、経験される感情の質が決定されるのである。従来の研究のほとんどが、結果的に生起した感情がその後の認知課題の遂行に及ぼす影響を主に検討しており、その感情がどのような文脈で生起したのかを検討してこなかったことは反省すべきであろう。ここで述べたポジティブな感情やネガティブな感情も、その感情生起の背後にはそれぞれ特有の認知的評価構造が控えており、それが感情生起後の認知に反映されると推測される。感情が認知過程に影響を及ぼすという個々の現象の意味を理解するためには、感情の存在意義を問うような観点が必要であることが指摘されている(池上, 1997)。感情は処理方略の選択に影響を及ぼすことで認知を規定するが、そのメカニズムは感情に先行する認知的評価に潜在的に規定されているという構図は、従来の研究では十分に考えられていたとは言えない。それゆえ、感情の影響を考える際に認知から感情への相互作用の視点を考慮することは、今後の課題となるであろう。生起した感情がどのような認知的評価を経たのかを切り離して考えていては、その意味を理解することができないのではないだろうか。

このような感情の適応的機能への関心はまだ始まったばかりである。ポジティブな感情とネガティブな感情とがそれぞれどのような働きを持つのか、それぞれどのような認知的評価構造に基づく感情であるのか、今後更に明らかにすることが望まれる。

謝 辞

本稿作成にあたりご指導・ご示唆を頂きました、京都大学大学院教育学研究科助教授吉川左紀子先生に厚く感謝致します。

引用文献

- Bless, H. 2000 The interplay of affect and cognition: The mediating role of general knowledge structures. In J. P. Forgas (Ed.), *Feeling and thinking: The role of affect in social cognition*, pp. 201-222. New York: Cambridge University Press.
- Bless, H., Bohner, G., Schwarz, N., & Strack, F. 1990 Mood and persuasion: A cognitive response analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 16, 331-345.
- Bless, H., Clore, G., Schwarz, N., Golisano, V., Rabe, C., & Wolk, M. 1996 Mood and the use of scripts: Does happy mood make people really mindless? *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 665-679.
- Bless, H. & Fiedler, K. 1995 Affective states and the influence of activated general knowledge. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 16, 331-345.
- Bless, H., Mackie, D. M., & Schwarz, N. 1992 Mood effects on attitude judgments: Independent effects of mood before and after message elaboration. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 104-114.

- Psychology*, 63, 585-595.
- Bless, H., Schwarz, N., & Wieland, R. 1996 Mood and the impact of category membership and individuating information. *European Journal of Social Psychology*, 26, 935-959.
- Bodenhausen, G. V., Kramer, G. P., & Susser, K. 1994 Happiness and stereotypic thinking in social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 621-632.
- Bower, G. H. & Forgas, J. P. 2000 Affect, memory, and social cognition. In E. Eich, G. H. Bower, J. P. Forgas, & P. M. Niedenthal (Eds.), *Cognition and Emotion*, pp. 87-168. New York: Oxford University Press.
- Clore, G. L., Schwarz, N., & Conway, M. 1994 Cognitive causes and consequences of emotion. In R. S. Wyer & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition: Vol. 1, 2nd ed.*, pp. 323-418. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Fiedler, K. 1991 On the task, the measures, and the mood in research on affect and social cognition. In J. P. Forgas (Ed.), *Emotion and social judgments*, pp. 83-104. Oxford: Pergamon Press.
- Fiedler, K. 2000 Toward an integrative account of affect and cognition phenomena using the BIAS computer algorithm. In J. P. Forgas (Ed.), *Feeling and thinking: The role of affect in social cognition*, pp. 223-252. New York: Cambridge University Press.
- Fiedler, K. & Bless, H. 2000 The information of beliefs at the interface of affective and cognitive processes. In N. H. Frijda, A. S. R. Manstead, & S. Bem (Eds.), *Emotions and beliefs: How feelings influence thoughts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fiedler, K., Lachnit, J., Fay, D., & Krug, C. 1992 Mobilization of cognitive resources and the generation effect. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 45A, 149-171.
- Forgas, J. P. 1992 Mood and the perception of unusual people: Affective asymmetry in memory and social judgments. *European Journal of Social Psychology*, 22, 531-547.
- Forgas, J. P. 1995 Mood and judgement: The affect infusion model (AIM). *Psychological Bulletin*, 117, 39-66.
- Forgas, J. P. 2000 Affect and information processing strategies: An interactive relationship. In J. P. Forgas (Ed.), *Feeling and thinking: The role of affect in social cognition*, pp. 253-280. New York: Cambridge University Press.
- Isen, A. M. 1984 Toward understanding the role of affect in cognition. In R. S. Wyer & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition: Vol. 3, 2nd ed.*, pp. 179-236. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Isen, A. M. 1987 Positive affect, cognitive processes, and social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology: Vol. 20*, pp. 203-253. San Diego, CA: Academic Press.
- Isen, A. M. & Daubman, K. A. 1984 The influence of affect on categorization. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1206-1217.
- Isen, A. M., Daubman, K. A., & Nowicki, G. P. 1987 Positive affect creative problem solving. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1122-1131.
- Isen, A. M., Means, B., Patrick, R., & Nowicki, G. P. 1982 Some factors influencing decision-making and risk-taking. In M. S. Clark & S. T. Fiske (Eds.), *Affect and cognition*, pp. 243-261. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 池上知子 1997 社会的判断と感情 海保博之(編)「温かい認知」の心理学 pp.99-119 金子書房.
- 伊藤美加 2000 a 気分一致効果研究における方法論上の問題 京都大学教育学研究科紀要, 46, 196-208.
- 伊藤美加 2000 b 気分一致効果を巡る諸問題 —気分状態と感情特性— 心理学評論, 43, 368-386.
- Mackie, D. M. & Worth, L. T. 1989 Cognitive deficits and the mediation of positive affect in persuasion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 27-40.

- Ortony, A., Clore, G. L., & Collins, A. 1988 *The cognitive structure of emotions*. New York : Cambridge University Press.
- Schwarz, N. 1990 Feelings as information : Informational and motivational functions of affective states. In E. T. Higgins & R. M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition : Foundations of social behavior : Vol. 2*, pp. 527 - 561. New York : Guilford Press.
- Schwarz, N. & Bless, H. 1991 Happy and mindless, but sad and smart ? The impact of affective states on analytic reasoning. In J. P. Forgas (Ed.), *Emotion and social judgments*, pp. 55 - 71. Oxford : Pergamon Press.
- Schwarz, N., Bless, H., & Bohner, C. 1991 Mood and persuasion : Affective states influence the processing of persuasive communications. In M. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology : Vol. 24*, pp. 161 - 197. New York : Academic Press.
- Schwarz, N., & Clore, G. L. 1983 Mood, misattribution, and judgements of well-being : Informative and directive functions of affective states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 513 - 523.
- Schwarz, N., & Clore, G. L. 1988 How do I feel about it ? : The informative function of affective states. In K. Fiedler & J. Forgas (Eds.), *Affect, cognition and social behavior*, pp. 44 - 62. Toronto : Hogrefe International.
- Schwarz, N. & Clore, G. L. 1996 Feelings and phenomenal experiences. In E. T. Higgins & A. Kruglanski (Eds.), *Social psychology: A handbook of basic principles*, pp. 433 - 465. New York : Guilford Press.
- Sinclair, R. C. & Mark, M. M. 1992 The influence of mood state on judgment and action : Effects on persuasion, categorization, social justice, person perception, and judgmental accuracy. In L. L. Martin & A. Tesser (Eds.), *The construction of social judgment*, pp. 165 - 193. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum.
- Wegener, D. T., Petty, R. E., & Smith, S. M. 1995 Positive mood can increase or decrease message scrutiny : The hedonic contingency view of mood and message processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 5 - 15.
- Wyer, R. S., Clore, G. L. & Isbell, L. M. 1999 Affect and information processing. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology : Vol. 31*, pp. 1 - 77. New York : Academic Press.

(博士後期課程 3 回生, 教育認知講座 日本学術振興会 特別研究員)